

第14回 阿蘇市読書感想文コンクール 入賞者紹介

ことは全応募66点の中から厳選な審査の結果、14点が選ばれました。入賞者は次のとおりです。(敬称略)

✿ 阿蘇市長賞

阿蘇小学校5年 甲斐 爽歌
私が学んだ「平和」の大切さ
阿蘇中学校2年 後藤 萌々香
千年の田んぼを読んで
阿蘇中央高校2年 山部 瑞葵
健陀多と私

✿ 阿蘇市教育長賞

一の宮小学校1年 鬼塚 柚莉子
「がつこうだってどきどきしてる」
をよんで
阿蘇小学校2年 藤原 凜愛
お肉にしてくれてありがとう
山田小学校3年 佐伯 香音
「がつこうだってどきどきしてる」
をよんで
一の宮小学校4年 小代 葵
心を入れかえるってどんなこと
一の宮小学校5年 都甲 航平
「木を植えた男」を読んで
波野小学校6年 古庄 陽彦
「マザーテレサ」
一の宮中学校1年 佐藤 美濤
「空色の地図」を読んで
一の宮中学校2年 吉田 有沙
「目の見えない人は世界をどう見て
いるのか」を読んで
一の宮中学校3年 清水 城斗
八俣大蛇から考えたこと
阿蘇中央高校2年 岩下 麗鈴
かけがえのないもの

✿ 図書館長賞

阿蘇中央高校2年 岩本 拓也
「命」とは『永遠の0』を読んで

市長賞 作品紹介

私が学んだ「平和」の大切さ

阿蘇小学校5年 甲斐 爽歌

「ダイヤモンドより平和がほしい」私は、この題名と男の子の写真にひかれました。男の子はずっと遠くを見ているようにとても気になりました。

シエラレオネ。ここでは政府と反政府の戦争が長引いていました。作者の後藤さんは、そこへ取材に行きました。

最初は、アンプティ・キャンブ。戦争で手足を失った人が大勢住んでいました。後藤さんはそこに住んでいる人に、「子どもが銃を持っていた。そしてその銃で私たちをうってきた。」という話を聞き、元子ども兵士の住んでいるし設へ向かいます。そこでムリアという男の子に出会いました。ムリアは、「やぶの殺し屋」とよばれていた元子ども兵士です。ムリアは戦場からにげて、このし設にやってきました。戦争で麻薬を体に埋めこまれ、きんだん症状もありました。でも今は、麻薬に勝ち、

やめることができました。しかし心のきずはまだ深く、ムリアは「家族を見ると、ぼくを殺しにやってきそうなきがする。そんな夢もときどき見る。」と話していました。ムリアは国を平和にするため、大統領になりたいそうです。

私は、本を読み終わって、表紙にのっていたムリアの気持ちを考えました。きっと平和な暮らしになつて、幸せなところを想像していると思います。この本で二つの大切なことを学びました。

一つ目は、平和のことです。今の私たちには平和が当たり前です。でも、世界にはムリアのように「平和がほしい」と願っている人がたくさんいます。それを考えてみれば、平和があることはありがたいことです。平和に感謝し、そんな重なるべきだと思います。

二つ目は、戦争のことです。みんな戦争はダメだと分かっています。だから、その後の行動が大切だと思います。私はもっと戦争のことについて調べたり、身近な人に話していくことで、平和の大切さを理解し、「戦争をしてはいけない」という気持ちを高め、深めていきたいと思っています。私には、ムリアのような経

験がありません。私がムリアの立場だったらと考えると、背中がゾクゾクしてきました。私だったら、自分のしたことばかり後ろ向きな考えばかりしていつまでも前に進めないと思います。もしもムリアがそばにいたなら、「今までよくがんばったね。私はムリアをそんけいするよ。」と言ってあげたいです。

私の心には、ムリアの「この国に平和がほしいんだ。なによりも平和なんだ。それがすべてさ。」という言葉が、ひびいてきました。平和をこれだけ大切にできる人たちはすてきだと思いました。とてもいい言葉だと私は思います。

最後に「自分にとっての平和って何だろう。」と考えました。戦争のない平和な世界。家族といっしょにいられること。学校に行ける。ご飯が食べられる。たくさん遊べる。言い出すときりがありません。一つ一つの小さな幸せも平和の証だと思っています。平和はとても温かくて、ムリアにも、私たちにも、大切でかけがえのないものだと思っています。

ムリアはだれよりも、平和がほしいと願っていました。だから私も、ムリアのように、平和を大切にできるようにな

りたいです。これから先、たくさん戦争の話を聞くといいです。だからそのときは、この本「ダイヤモンドより平和がほしい」と重ねながら聞きたいです。そしてこれから、平和に尽くした人物について調べてみたいですね。

(審査員講評)

戦争に巻き込まれた元子ども兵士ムリアの、国を平和にするために大統領になりたいという生き方に共感しつつ、平和とはどういうことか、そしてその平和のために自分はどうするべきかについて、しっかりと考えながらこの本を読んでいった様子が感想文の随所に見られます。本の題名の「ダイヤモンドより平和がほしい」の意味を十分理解しています。感想文のタイトルのように、この本から平和の大切さについて多くのことを学びましたね。

千年の田んぼを読んで

阿蘇中学校二年後藤萌々香

私の家は、兼業農家です。父が南阿蘇村で毎年お米を作っています。春になると、私も苗床作りや田植えの手伝い、秋になると稲刈りのための角刈りなどをします。毎年、父も私たちもその季節になると忙しいです。

私の家の田んぼはいつからそこにあるかは知らないけれど、千年前といえば古墳時代になります。そんな前から田んぼを使った農業があるとすれば、どんな方法で稲を作ったか興味がありました。

千年の田んぼの舞台は、山口県の萩市見島にある田んぼです。見島は本州から船で行かないと到着できず、見島の周囲は十八キロメートルと小さな島です。よく台風が通り、山々の斜面には棚田が一面に広がっています。田んぼの周りにはたくさんのお池があり、それから水を供給しています。

この本を読んで大変だと思ったのは、田んぼへの水入れのところでした。見島の田んぼは砂地で、ザルのように水が抜けていくことから「ザ

ル田」と呼ばれています。昔は、ため池から「水かえた」というおけを使って水を田んぼに入れていたそうです。雨が振らない時はため池も枯れて、稲が育たない年もあったと書いてありました。私の家では、スイッチを入れると、電気で地下水をくみ上げ自動で田んぼに水を入れてくれます。人力であの広い田んぼに水を入れていたと考えると想像もできません。

見島では、四回代かきをすると言っていました。「代かき」とは、田んぼに水を入れ土を練ることで、苗を植える前に行う、米作りにはかせない農作業です。私の家では、二回しかしないと父は言っていました。見島で四回もするのは、田んぼの底から水漏れを防ぐために行っており、現在はトラクターだけで、昔は牛とすきで人力で行っていたそうです。見島の田んぼは、熊本の田んぼとは違って手間がかかって大変だな、と思いました。兼業農家の私の家ではできない作業だとも思いました。

見島では、現在、耕作放棄という問題が起っています。島の住民は耕作放棄をしたくてしている訳ではなく、高齢

化と後継ぎがないという問題により「放棄」ではなくて「できない」という現実に直面しています。あと十年もすれば耕作する人間がいなくなる、とも言われており、島には子供が少なくなっているそうです。子供たちがいたとしても、高校がなく家族自体が島を離れ、人口が減り耕作できずに田んぼが荒れているところが多くなりつつあるそうです。その問題は、見島だけでなく今の日本の抱える農業問題と同じだと思いました。

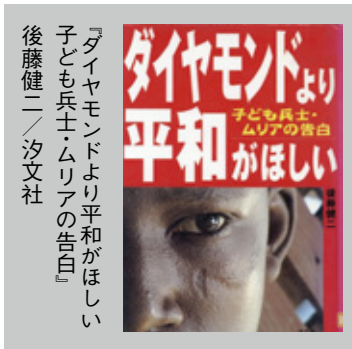
私の家は兼業農家で父が米作りをしています。お米だけでは収入が少なく、別の仕事もしています。父は農家を継いで欲しいとは言いません。なぜかと聞くと、「兼業農家は二つの仕事をしないといけないからとても大変。田んぼは守っていききたいがそんな大変な作業を子供にさせたいとは思わないからだ。」と言っていました。人がいない見島とはまた意味が違います。これも、後継ぎ問題だと思います。見島の田んぼの今後が心配ではあります。日本全体の農業もどうなるのか心配になりました。

本の最後にこんな一文がありました。

「誰かが作ったにせよ、島での限られた自然化環境の中から生活を築き上げ、米を作り未来を次の世代へ託していった」

どんなに大変でも生きようとした希望が一つ一つのため池に込められています。命を守ろう、命をつなぐと先人の人達が託した希望が、千年続いたこの見島の田んぼだったのでしょうか。人間は食べないと生きてはいけません。生きるだけではなく、生活水準の満たされた豊かな生活も大切です。今の農業では、無理をしなければ田んぼの維持はできない状況だと、父は見ています。この問題はこれからの私達にかかっています。農業をどういう方向へ導いていくかは、私たちの選ぶ道で左右されることでしょうか。これから起こるだろう農業問題に関して、興味を持ってみたいと思うようになりました。

「生きよ！」「いかなる苦境のなかでも工夫し、生きよ！」最後に、そう作者はしめくくっています。ザルのような田んぼでも、工夫をすれば稲は実のる。この本で学んだことを胸に、いかなる困難にぶちあたっても、すぐにあきらめるのではなく、食らいついでいこうと思いました。



『ダイヤモンドより平和がほしい
子ども兵士・ムリアの告白』
後藤健二／汐文社

(審査員講評)

自分の家が兼業農家で、農業の手伝いをして後藤さんだからこそ、この山口県見島の米作りの工夫と苦勞をよく読み取っています。さらに、お父さんから聞いた兼業農家のわけと後継ぎ問題についても、この作者の思いと重ね千年続いた農業をどういう方向へ導いて行くかについて、「いかなる苦境の中でもあきらめず工夫し生きていく」力をもらい、今後の自分の生き方について考えているのがとてもすばらしいと思います。



鍵陀多と私

阿蘇中央高校二年 山部瑞葵

なぜ鍵陀多は、罪人たちにこう言ったのか。「この蜘蛛の糸は己のものだぞ。お前たち

は一体誰にきいてのぼって来た。下りろ。下りろ。」そして、鍵陀多は、自分の目の前で蜘蛛の糸が切れ、地獄に引き戻されたとき、どのようなことを思ったのか。

私が鍵陀多の立場だったら、どうするだろうか…。

自分なら、地獄で、血の池に浮いたり沈んだりするのは嫌だし、針の山などを見たら鳥肌がたつ。早く地獄からぬけ出したいと思うだろう。そこに蜘蛛の糸が自分のところに現れたら、必ず我先にと登っていくだろう。助かりたいし、地獄からぬけ出せると思うからだ。だが、その蜘蛛の糸はあまりにも細く、たくさんの人がしがみつけば、すぐに切れてしまう。鍵陀多もそんな風に思ったからあとから登ってきた罪人たちに、「下りろ。下りろ。」と言ったのではないだろうか。つまりは、自分だけ助かればよいという、エゴの表れだ。

では、逆に鍵陀多が罪人たちに、「下りろ」と言わなかったらどうなっていたか。不思議と糸は切れず、最後まで蜘蛛の糸を登りきり、極楽に行けたかもしれない。罪人たちと一緒に幸せな暮らしができたかもしれない。そうである

ならば、「蜘蛛の糸」とは何であるのか。御釈迦様の思いそのもの、人の幸せを考える慈悲の心が「蜘蛛の糸」だったのかもしれないし、その他人を思いやる気持ちこそが万人を救うということの意味しているのかもしれない。しかしそののであるならば、地獄から助かった鍵陀多には、罪悪感がうまれるのではないか。人を殺したり、家に火をつけたりした大泥棒なのだから。だったら、地獄で成敗をうけた方がよいのではないかと。今度は、鍵陀多自身が苦しむのかもしれない。

しかし、現実には、自分の目の前で蜘蛛の糸が切れ、鍵陀多は、地獄に引き戻された。鍵陀多はどんなことを思っただろう。罪人たちのせいで地獄に戻された。絶対許さない。そう思うだろうか。または、自分がしてきたことを洗い流そうと罰を受け入れる気持ちになっただろうか。私なら最初はあるとから登ってきた罪人たちのせいでと恨むだろうが、「下りろ。」と言わなかったら蜘蛛の糸は切れなかったかもしれないと思えるようになったら、きっと悔やんでしまうかもしれない。最初は恨んだとしても、自分の悪を認めら

れる日がきたら本当の意味で鍵陀多は、救われるのではないかと私は思う。

鍵陀多が経験したことは、私たちの日常でも起こり得ることではないかと考えた。例えば、相手のことを考えずに自分のことを中心にして行動したり、悪口を言ったりすることなどだ。私自身も一つのことに集中してしまい、周りが見えない言動をするときがある。「このことは、鍵陀多が罪人たちに「下りろ。下りろ。」と言ったように、自分の都合だけを優先して無意識でやってる罪だ」と思う。また悪口を言うことは、地獄に引き戻されるのと同じではないかと思う。悪口を言った直後は、何も思わないかもしれないが、数日たつと何であの時あんなことを言ってしまったのだらうと後悔する日がくるからだ。だれかを傷つけているのかもしれないという思いを常に心に留め、周りの状況や思いに配慮しながら行動していきたい。



自身を見つめ直し、良い心をとり返してほしいと思った。現在も人間のエゴが引き起こす様々な問題や犯罪が起こり続けている。どんな人間であれ、本来は「善」なのだと、私は信じていたい。

(審査員講評)

古典があまり読まれなくなつたとは言え芥川龍之介の『蜘蛛の糸』での応募は多く、過去の審査でも何度か読む機会がありましたが、山部さんの作品は中でも強く印象に残るものでした。それは山部さんのあくなき探求心です。鍵陀多の行動と心理をこれでもかと追及し、「私なら…」と疑問に思い続け、「鍵陀多が経験したことは、私たちの日常でも起こり得ることではないか」という結論に達します。優れた批評性とそれを論理づけ言葉にした力のこもった作品です。